

桶狭間の戦い 真相に迫る

---今川義元をナメたらいけない!---

2022/11
横浜歴史研究会
真野信治

桶狭間の戦いは、永禄三年(1560)五月十九日【グレゴリオ暦に直せば1560年6月23日となる】に尾張国知多郡桶狭間でおこった織田信長軍と今川義元軍の合戦である。三万人弱の大軍を率いて、三河・尾張に侵攻してきた今川義元に対し、織田信長が二、三千ほどの兵力で、義元を討ち取ったと言う戦いである。

桶狭間合戦の様相は？

- ①迂回奇襲説→→→ 明治時代の陸軍参謀本部が編纂した『日本戦史 桶狭間役』に載るもので、軍事の権威がまとめたものであることから永く信じられてきた。しかし近年、信憑性の低い『信長記』をベースにしていることからいくつも問題点が指摘され、現在では大半の研究者が否定している。
- ②正面攻撃説→→→ 昭和五十七年に藤本正行氏が提唱した説で、桶狭間山にいた今川軍に接近し、正面から攻撃をしかけた。今川軍の前軍は織田軍の突然の正面突撃により突破され、その乱戦状態で義元の本陣になだれ込み義元は旗本に囲まれ退却。だが、追撃の結果、ついに義元は討ち取られた。
- ③別働隊説→→→ 正面攻撃+別働隊による背後からの奇襲という説

『信長公記』には「山際迄(やまぎわまで)人数寄せられ候の処、俄かに急雨(むらさめ)石氷を投げ打つ様に」とある。信長の行動としては山の近くまで軍勢を進めたことしかわからず、そのあと急に強い風雨が起り、それが収まってから信長軍が今川勢を突き崩す記述が続く。中嶋砦から義元の本陣までの経路については記載がない。当然、迂回したとも記されていないため、現在では迂回奇襲説は否定される傾向にある。

二つある桶狭間古戦場と桶狭間山

現在、桶狭間の戦いがあった場所として二か所が伝えられている。

- ①愛知県豊明市栄町南館「桶狭間古戦場」
- ②名古屋市緑区有松町大字桶狭間「田楽坪古戦場」

双方、桶狭間山を真ん中にして北東と南西に位置している。小和田哲男先生は、織田軍に攻撃を受けた際に沓掛城に逃げようとした者と大高城に逃げようとした者と二つのグループに分かれてしまい、それぞれが織田軍の追撃にあった場所として言い伝えられたと説いておられる。この点に関しては、後項にて詳しく触れることとする。『信長公記』に記される桶狭間山については、現在の地図上には見いだせないが、小和田氏は明治二十一年の地図で確認できる、標高六十四メートルの丘が桶狭間山ではないかと結論付けしている。ここは二つの古戦場の位置からも整合的に理解ができてくるという。



桶狭間古戦場伝説地
(愛知県豊明市)



桶狭間古戦場公園
(名古屋市緑区)

織田信長（長興寺蔵）



今川義元をなめてはいけない！

- ・義元は信長の陽動作戦にのせられたのか？
- ・義元は最前線で目立つ塗輿に乗っていたのか？
- ・今川軍は少数の織田軍の奇襲にやられたのか？

織田信長を過大評価してはいけない！

- ・信長は今川勢をおびき寄せていたのか？
- ・信長は義元本陣の場所を把握していたのか？
- ・織田勢は今川勢を正面突破できたのか？

今川義元（万松寺蔵）



たとえば、弘治三年、永禄二年におこった事件から考えてみると…

最前線で今川方として城を治めていた戸部政直、山口教継親子を義元が切腹事件させた事件である。通説では、信長が偽書を使って義元に偽情報を流し、これらを裏切り者と断定させ、断罪させたとなっている。しかし、この話はどうも出来すぎており、その発案者が木下秀吉だったという伝承も眉唾である。政直はその名の通り戸部城主だとしているが、実はそもそも織田方の水野帯刀が城主だったと言う記録もある。同様に山口父子も、信長の工作により織田方に再転換の疑いをかけられ、切腹されたとある。実はこの直前に鳴海城・大高城・沓掛城に今川家譜代の家臣を城番として入城させ、そのタイミングで親子は排除されていることから、義元による信長の工作を逆利用した反復絶え間のない外様衆の体のいい排除策ととれなくもない。いずれにしろ、事件後の鳴海城などの重要拠点に子飼いの家来を配置できているのであるから、信長の工作は決して成功していたわけではないのである。『反間の計』はそれほど機能はしなかったということ。

大高城の意義

大高城は戦術上、非常に重要な拠点である。城下に船の発着港を保持し、伊勢湾海運の拠点、加えて刈谷から鳴海・熱田までを結ぶ鎌倉街道の重要な結合地点でもある。信長がこの大高従及び鳴海城奪還作戦の一環として盛んに付城を築いて牽制していたことの理解できる。しかし通説の中には、この信長の仕掛けた罠にまんまと嵌められた義元が大高城の後詰めとしてのこのこと出てきたところを急襲されたとの説がある。この説は現実的ではない。義元は信長に嵌められるまでもなく、そもそも大高城、鳴海城を起点として尾張を制圧する作戦を十年前から計画しているわけである。一方、信長が罠を張っておびき出したと想定した場合、その後の具体的作戦がみえてこない。

義元の挟み撃ち作戦

信長は合戦後、尾張国守護の斯波義銀を追放している、なぜか？『信長公記』に「吉良、石橋、武衛仰談らはれ(おおせかたらわれ)、御謀叛半の刻、家臣のうちより漏れ聞え、則御両三人御国追出し申され候なり」とある。おそらく、義元はこの足利一族と同族であるがゆえに、信長が出兵しているすきを狙って尾張本國で兵を挙げさせ、信長および織田軍勢を挟み撃ちにすることを考えていたと思われる(特に海上からの今川軍引き入れを画策していた)。こうしてみると、義元の尾張進行はあらゆる方面に気を配り、万全な準備をしていると言っていい。決して信長を甘く見ているとは思われない。戦に勝った信長が速攻でこの三卿を追放した事実がこの論拠となっている。

信長公記

太田牛一著

全16巻

1567年上洛まで…「首巻」1巻
上洛から本能寺まで…「本編」15巻

『信長公記』について

『信長公記』は、全16巻で、織田信長の幼少期から永禄11年（1568年）の上洛までを描いた「首巻」と、上洛から天正10年（1582年）の「本能寺の変」まで15年間を1年1巻で著した本編15巻からなる。これをもとに小瀬甫庵は『信長記』を著し、元和八年（1622）に刊行した。両者を区別するために、太田牛一の『信長記』を『信長公記』、小瀬甫庵の『信長記』を『甫庵信長記』と呼ぶ。牛一は従軍していなかった場面では「申し候」と人からの伝聞としており、これは無視できない。

桶狭間の戦いを知る上ではこの「首巻」を確認するしかない。しかし「首巻」は自筆本がなく、写本のみである。

■町田久成旧蔵本（通称「町田本」） ※現在行方不明。我自刊我書、『史籍集覧』所収。

■太田家→織田家→近衛家所蔵本（通称「陽明本」） ※角川文庫版『信長公記』の底本

■堀尾家→天理大学附属天理図書館所蔵（通称「天理本」）

■東京大学図書館所蔵の旧南葵文庫本

『信長公記』には、15巻本系、16巻本系、草稿段階の3冊本の3種類あります。

※中でも特異なのが「天理本」であり、他の写本よりも詳しい。

たとえば、桶狭間の戦いを見ると、

【町田本】「御敵今川義元八四万五千引率しおけはさま山人馬の休息在之天文廿一壬子五月十九日午刻戌亥尔向て人数を備」

【天理本】「御敵今河義元人数四万五千にておけばさま山に五月十九日午刻戌亥に向て段々に人数を備」

①町田本では「人馬の休息」と、桶狭間山ではちょっと休憩しただけのように考えられるが、「天文廿一壬子」と理解不明な記事がある。

②天理本では「人馬の休息在之」がカットされ、「段々に」が書き加えられたことにより、桶狭間山に本陣を置き、桶狭間山の戌亥（北西）斜面に（段々畑のように）段々に兵を配置したと読み取れる。「天文廿一壬子」もカットされている。

「天理本には古い呼称「おけばさま」が使われているので、天理本が最も古い写本であり、「堀尾吉晴家臣の小瀬甫庵は、この最も詳しくて古い『信長記』（堀尾家本→天理本）を読んで、『甫庵信長記』を書いたので、共通点がある」とも考えられる。



永禄3年(1560)五月十七日

五月十二日から順次軍勢を発進、今川義元及びその配下が沓掛城に入城、義元本人は十八日着か？

総数は二万人弱か？

今川軍の先鋒（瀬名氏俊）がすでに十七日の段階で桶狭間山に陣を築いていたとある（『伊東法師物語』）。総大将の休憩場所として、この辺りをあらかじめ想定していた。一説にはこの陣築を織田方の密偵（おそらく梁田政綱）に見えられ、その報告を受けた信長が、当日一か八かその場所を急襲できた、という説もある。一つ言えることは、義元は昼時になったからと言って何の備えもない所で休息をとったわけではないという事である。『信長公記』はこの場所で、義元が鷲津丸根砦が陥落したことを知って「謠を三番うたはせられたる由候」と記しているが、もともと理にかなった場所を選定し、休息するスケジュールになっていたと考えられる。したがって、信長は梁田の情報について休憩場所の確定を重視したわけではなく、大高城に移動する間に休息をとるかもしれないと言う今川軍スケジュールの把握を重視したのだろう。多勢に無勢である味方が今川本陣を襲撃できる唯一のチャンスなのである。

十八日

義元は軍議を開く。そこで諸将の翌日の軍事行動を「丸根砦を責干すべき」『伊東法師物語』とした。

諜報によってこの情報を得た丸根砦の佐久間盛重が清洲に「十八日夜に大高城へ兵糧入れを行うらしい」と報告。さらに二か所の砦（丸根・鷲津）を同時に攻めるであろうことも把握していた（『天理本』）。しかしこれは誤報。そもそも砦を先に攻めて無力化した後に安全に兵糧入れを行うのが常套であり、実際の動きも同様であった。しかし、信長は佐久間の情報を受けても動かず（実は、義元が確実に大高城に向かうかどうかを確認するため、待機していたと考えられる）。

十九日

未明、丸根・鷺津砦攻防戦始まる。『信長公記』

午前四時ごろ、旧法を受けた信長は「敦盛」を舞ってから城を飛び出す。従う者、近習僅か五人。

松平元康・朝比奈泰朝が両砦を制圧

午前八時ごろ、義元が沓掛城を出発

午前八時ごろ、信長は熱田神宮に到着し、軍勢が揃うのを待ち東南へ進軍する。その際、すでに丸根砦、鷺津砦が落ちたのを知る

午前十時、丹下砦に入り、続いて善照寺砦へ移動

同時に中島砦から、佐々隼人正・千秋季忠隊が今川軍へ突入、三百騎が一瞬にして全滅。これは果たして抜け駆けか？

実はこれは善照寺砦からの出撃と見るべきである(『天理本』)。そうになると信長了解の上の行動と考えられ、もっと言えばお取りであった可能性もある。

この善照寺砦から見て、信長は義元が沓掛から大高に向かっていることを確信した、なぜか？

加えて、その途中で休息する可能性も前々日の報告から確実視しており、おそらくこの瞬間にその本隊を狙うことを決めたと考える。

善照寺砦は、多少の見晴らしがよかったらいい。信長はその善照寺砦で沓掛城から出撃した今川軍を目視した可能性がある。その際の今川軍の槍隊が不ぞろいの槍を掲げていたことから、『あれが義元の本隊だ』と看破している。何故か？これは今川家の『寄親寄り子制度』を熟知していた信長のファインプレーとでもいうべきか。いわゆる寄り子とは普段は農民の集団がほとんどであり、戦の際には『番槍(ばんそう)』といって同一の槍を配給される。したがって、寄り子の隊(つまり大物ではない足軽中心の隊)は槍の長さがすべてそろっている。一方、寄り親は主に重臣レベルなので槍はすべて自前である。したがって、それぞれの武器を持ち寄るため、槍などはおのずと不ぞろいとなる。

午前十一時、義元が桶狭間山にて昼休憩か？

この時点で、今川軍は幾段にも布陣する魚鱗の陣で対応していた。つまり前方一キロに渡って前衛部隊を展開させている。すなわち今川家でも非常に武力の高い松井宗信、井伊直盛らの隊(三千五百騎あまり)が前進を開始している。松井は長坂道を通り前方に展開、直盛は巻山に陣を張る。そして義元本陣は少なくとも五千騎の旗本で取り巻かれていたと思われる。休息時に、先刻の小競り合いで討ち取った佐々隼人正・千秋季忠の首が届けられる。通説では、これらの首実検をしながら、昼時の宴を開いている。『甫庵信長記』は「酒宴乱舞」としている。

実はこの首について、千秋季忠は、突撃時に信長の旗と信長らしき陣羽織を着て「我こそは信長なり」と言って討ち取られたとの伝承があり(『中古日本知乱記』)、今川方はそれを信じて信長と勘違いし、義元もそれを聞きご満悦であった(『道家祖看記』)。そして最前線にいるにもかかわらず戦勝祝いに大掛かりな宴を開いてしまったと考えられなくもない。そもそも重心でもない家来二人の討死でこれほどの宴会をひらくだろうか。因みに千秋季忠はちょうど信長と年恰好も似ていたと言う(季忠と信長は同い年)。但し、信長でなかったことはすぐ判明する。ただ、これが事実であれば、この首実検が大高城に入る予定の義元の行動を必要以上に遅らせたこととなり、千秋季忠は討死してしまったが、大殊勲といえるであろう。

その間、信長は中島砦へ移動。

善照寺砦にはたくさんの旗指物を立て、そこにまだ信長がいるように装った。前進することは重臣から猛反対されたが、二千騎ですすむ。

そのまま、最前線に進出するがここでも反対意見があった

この時、前田又左衛門・毛利十郎・木下雅楽助ら十人がそれぞれ敵の首を提げてやってきた(『信長公記』)。

実はこの首取り集団はほとんどが信長の馬廻衆であった。しかし、どの戦場でこれらの首を獲ったのか？その直前に信長は「分取りをなすべからず、討捨てたるべし」と命令しているので、信長とは別行動をとっていたとみるべきである。佐々・千秋の先駆け隊にいたのでは？と見なすには、この隊がほぼ全滅をしていることから無理がある。もうひとつ不思議なこととして『信長公記』に沓掛の峠でかなり太い楠木が暴風雨にあおられ、東に倒れたとある。続けて「熱田大明神の神戦かと申し候なり」とあるが誰がそれを見たのか？この表現は先刻信長が熱田神宮に立ち寄ったことを知っている人間で、この大雨を神のご加護としていることから織田軍の一員であることは間違いない。そうすると、この時点で、織田の別動隊が鎌倉住環沿いの沓掛近辺にいたことがわかる。さらに逢左文庫所蔵『桶狭間の図』に「今川魁首此道筋ヲ押」とあり、今川軍も鎌倉往還付近に展開していたこともわかっている。つまり、今川・織田の主力戦とは別にこの街道沿いでも早い段階で小競り合いがあり、その際に獲った首級を前田らが持ってきたと解釈できる。しかも、前田ら以外の軍隊はそのまま沓掛方面へ進軍中であると考えられる。

午後一時、突然のゲリラ豪雨が西から東へ吹き付ける。つまり織田方には追い風、今川方には向かい風である。織田軍は「石水まじり」と称しているこの豪雨の中、今川軍の前衛部隊が布陣する丘の際まで進んだことは事実であろう。一方、今川方も中嶋砦からの織田軍の進軍を確認している(『三河物語』)が、豪雨で見失った可能性も考えられる。そこに前備えの松井宗信部隊が押し出してきた可能性はある(『松井家系譜』)。果たして、この二千騎弱でそのまま正面攻撃を行ったのであろうか。この屈強の松井隊を含めた今川軍前衛を正面突破して義元本陣に攻め込むことを想定するのは現実的ではない。

このような織田軍の正面突破説はあまりにも今川軍を過小評価しているようではない。

- ①突然の豪雨が今川軍に向かって降り注いだことにより、混乱し集中力を欠き、織田軍の接近がわからなかった
❖ しかし、信長は雨が上がった頃合いを見て突撃命令を出している『三河物語』『信長公記』
- ②或いは、激しい豪雨により、それを避けていた今川軍が、いきなりの敵襲に反応できなかった
❖ しかし、織田軍が中嶋砦を出撃した時点からその行軍は確認されており、前衛はすでに臨戦態勢のはず、奇襲を喰らうとは思われない
- ③或いは、松井軍・井伊軍をうまく避けて、義元本隊に襲いかかった
❖ 可能性はあるが、迂回した分、到達するまでに時間がかかり、しっかり準備ができていた義元本陣が簡単に崩れるとは思われない

やはり正面からの突撃で今川軍前衛部隊をやり過ごし、本陣に攻め込み、大将義元を討ち取ることは、非常に難しい！

午後二時、雨が上がった直後、信長は「是へ懸かれと御下知あり。未剋東へ向てかかり給ふ」とあり、この攻撃を受け、今川軍は「水をまくるがごとく後ろへくはっと崩れたり」『信長公記』と記している。すなわち、義元は輿を捨てて三百騎の親衛隊に周りを囲まれながら騎馬で退却しようとしたが、度重なる攻撃で周囲の兵を失い、ついには信長の馬廻に追いつかれる。義元は服部小平太一忠を返り討ちにしたが、毛利新介によって組み伏せられ、討ち取られた。『水野勝成覚書』の伝聞によれば、義元は首を討たれる際、毛利の左指を噛み切ったという。

雨が上がった直後に、いきなり織田軍が攻撃を仕掛けてきたのは史料から事実と思われる。ただ果たしてこの攻撃で今川軍すべてがパニック状態になったのであろうか。義元本陣が前衛で何が起きているのかを速やかに把握できなかったとは思われない。今川軍は大雨を避けるため、てんでに雨宿りをして散っていたとする説もあるが、十七日にあらかじめ陣を築いていた事実があり、少なくとも旗本くらいはその陣を中心にまとまっていたと考えてもおかしくない。逆に、慌てたのは前衛の松井隊或いは井伊隊あたりなのではないか。事実、松井宗信・井伊直盛は討死している。しいて言えば、この信長正面攻撃隊と松井・井伊隊はがっぷり四つの戦いをした可能性があり、その間、義元および旗本隊は念のため後退することとした。「くはっと崩れた」ように見えたのは、一斉に撤退行動をとったため、織田方にはそう見えたのかもしれない。ただその際、徹底されなかったのが、沓掛城方面へ撤退か？大高城方面へ撤退か？の命令系統がはっきりせず、二手に分かれてしまった。桶狭間の古戦場が二つあるのは、それぞれの今川撤退隊が織田軍に追いつかれて抵抗した痕跡が伝承となって残ったと考えられる。これは義元にとっては痛いところだが、兵数を減らしながらもなんとか沓掛城近辺までたどり着いたものと思われる。しかしそこへ織田軍別動隊と遭遇してしまった。その隊には、服部小平太と毛利新介がいたのである。

ここで別角度から記されている史料『松平記』を確認する。そこには「信長急に攻め入り、笠寺の東の道を押出、善照寺の城より二手になり、一手は御先衆へ押来、一手は本陣のしかも油断したところへ押来り」と記されている。これは、善照寺砦からは二手に分かれ、一手は佐々隼人正・千秋季忠ら率いる別働隊が今川軍の「御先衆」つまり先鋒に攻めかかり、同時に中嶋砦から出撃した信長率いる本隊が義元の「本陣」に攻めかかったとみるべきではないかと言われている。しかし、佐々・千秋隊の出撃と同時であったかどうかは判別しづらい。どちらかという、これより前に善照寺砦から発進した別働隊の存在のことを語っているとするほうが現実的と思われる。(『三河物語』)

午後四時、敵将今川義元の首を挙げた織田信長は勝どきを挙げさせ、その場から引き上げる。



このように善照寺砦から分かれて、鎌倉往還を東進した別働隊は途中暴風雨の中、今川軍の別働隊を撃破し、沓掛城付近に至る。前田又左衛門らの首取り集団は信長にその働きをアピールするため、すでに隊を離れている。またこの時、隊の者が大楠木の倒壊を目にしている。その後、雨はやみ、鉄砲を使うこともできたようだ。『三河国郡志』に「柴田右衛門、背ノ山上より鉄砲を放」とある。ここで言う右衛門とは、猛将柴田勝家の事なのかは不明。加えて、もう二人重要人物がこの隊に参加していたと考えたい。『譜牒余録』に「服部小平太上之山より突き懸かり」とあることから、最初に義元を補足した**服部小平太**、およびこの隊を構成している馬廻衆と近い関係にある母衣衆に属している**毛利新介**である。「上之山」を現在の豊明市上の山と想定した場合、ほぼ別働隊が行き着いた可能性のある地点と重なっている。おそらく別働隊は、沓掛城に逃げ込もうとしている義元および旗本とばったり遭遇したか、移動中に山の上から補足したか、いずれにせよそこで戦闘状態になる。史料に沿えば、山の上から鉄砲を撃ちかけ、義元めがけて襲いかかり、小平太・新介の連携で義元を討ち取ったという経緯であろう。因みに信長本隊には、小平太の兄小藤太が属しており、この兄弟を混同した言い伝えが多くあるという。

通説では、義元および今川軍の評価は非常に低い。しかし、多くの史料を深耕してみると… 義元は決して信長の仕掛けたわなにはまって、のこのこやってきたわけではない。主に海上からの尾張制圧を企てていた可能性とその拠点として活用したい大高城に後詰として軍を展開させたのであって、かなり以前より計画していた戦略である。豪雨のあと、いきなりの織田軍突撃も、その前衛部隊は浮足立った可能性はあるが、義元本陣までもがその場で壊滅したとは思われない。それほど軟弱な軍ではなかろう。

※ 義元は一時間以内で入城できる大高城にあえて入らず、出陣してきている信長を殲滅するため、情報を収集していた。その中で最も有効な布陣を模索し、おけはざま山にて停滞している時、降雪に見舞われてしまい、それが命取りだった。天祐を得た信長と天に見捨てられた義元、それが勝負を決する要因かもしれない

参考図書
 小和田哲男『今川義元』(ミネルヴァ書房)、『桶狭間の戦い』(学研M文庫)、『今川義元知られざる実像』(静岡新聞社)
 和田裕弘『信長公記』(中公新書)、橋場日月『新設桶狭間合戦』(学研新書)、渡辺文雄『桶狭間合戦の真相』